



映画監督 飯塚花笑さんインタビュー

前橋を拠点に活躍する映画監督の飯塚花笑^{かしょう}さん。ご自身がトランスジェンダーであることを公表し、マイノリティが登場する映画作品を手掛けられています。今回は最新作『ブルーボーイ事件』クランクアップ後の飯塚さんにインタビューをさせていただきました。

飯塚さんの事務所、千代田町にあるスタジオ6.11にて

ブルーボーイ事件とは

1964年に十分な診察を行わずに性別適合手術を行った産婦人科医が、1965年に麻薬取締法違反と優生保護法の違反により逮捕された事件。1969年に有罪判決を受けた。

売春の取り締まりが課題となっていた当時、性別適合手術を受けた後に売春をした人たちがいた。戸籍上は男性。法的には男性として扱われたため、十分な取り締まりができなかったという背景がある。

新作映画『ブルーボーイ事件』の製作に際して込められた想い

次の映画の題材を考えていたときにこの事件に興味を持ちました。1960年代には「LGBT」という言葉も概念もないなかでたくましく生きている方がたくさんいらっしゃったのを知り、彼ら彼女らのことをちゃんと描いてみたいと強く思って、その思いがあって企画に取り組み始めました。



映画を製作するうえでのこだわりポイント

セクシュアルマイノリティが登場するところにこだわりを持っています。なぜそういった映画を作りたいと思ったかというと、「自分のような（トランスジェンダーの）人間をメディアの中に見たい」という気持ちが幼少期にあったんです。僕がこどもだった頃は情報にアクセスできる環境が無かったので、すごく孤独でした。

マイノリティを映画の主軸にすることで多様な生き方の理解につながることもありますし、孤独感が和らぐ人もいるかもしれない。それが映画にできることだと考えています。

小学2年の頃からの夢、映画監督。当時の心情

小学生のころは言葉を介してコミュニケーションをしていくことにコンプレックスのあるこどもでした。そんなときに出会ったのが映画です。直接言葉のやり取りをしなくても作品を通して言いたいことを伝えてくれる。「あ、人としゃべるの苦手だけど、こうやって違った表現で人と関わることができるんだ」ということを強く思いました。そのときの原体験が映画を作ってみたいなという気持ちにつながったのだと思います。

前橋市に住んでいる方々へ。飯塚監督からのメッセージ

今回のブルーボーイ事件もそうですが、本当に色々な生き方があって…多様性と言ってしまえば簡単ですけど自分と違った価値観や生き方をした他者を受け入れていくこと、「もしかしたら困っているかもしれない」と想像してみることがすごく大事だと思っています。これを機に何となく聞き流すのではなくて、もう一歩一緒に生きていくために考えたり、想像を膨らませたりということと一緒にやってみませんか？ということをお伝えしたいです。

飯塚花笑さん プロフィール

1990年生まれ。前橋市出身。映画監督 根岸吉太郎氏、脚本家 加藤正人氏に師事。トランスジェンダー。自らのアイデンティティから作られる映画が国内外で高い評価を得る。自身の半生を映画化した『僕らの未来』が、ぴあフィルムフェスティバルで受賞。バンクーバーやロンドンなどの映画祭でも注目された。

2019年 フィルメックス新人監督賞を受賞。

2022年『フタリノセカイ』が新宿シネマカリテにて5週上映のロングランを記録。

2023年『世界は僕らに気づかない』が大阪アジア映画祭にて来るべき才能賞を受賞。世界7カ国、9つの映画祭より招待を受ける。

2024年 前橋市の魅力を広く発信する「まえばしPR大使」就任。



知ってる？ カタカナ英語

《トランスジェンダー》

生まれたときの身体と心の性別が一致していない人のことです。性自認（自分の性別をどのように考えているのか）について言及するときに登場する言葉です。

トランスジェンダー女性／MtF (Male to Female)
生まれは男性で、女性として生きることを望む人

トランスジェンダー男性／FtM (Female to Male)
生まれは女性で、男性として生きることを望む人



左：LGBTQの旗

赤・橙・黄・緑・青・紫の6色の虹色

右：トランスジェンダーの旗

いずれもLGBTQの権利運動・パレードなどでよく使われています。

いろいろな生き方があるということが、
たくさんの方に届くと嬉しいです。

(記事：石井)